

小美玉市の歴史を知ろう 50

江戸時代の予防接種 種痘 — 徳川齊昭公と本間玄調 —

人類の歴史を紐解くと、感染症との闘いとも言っても過言ではありません。古代エジプトのミイラからも感染症の一つ、天然痘に感染した痕が確認されています。

近代医学以前の人々にとって、ペスト、コレラ、結核、インフルエンザなどのウイルス感染症は、まさに恐れの対象でした。21世紀になってもなお、新たなウイルス「SARSコロナウイルス」が発見されています。

天然痘ウイルス

人類が根絶した唯一の感染症ウイルスがあります。「天然痘ウイルス」です。痘瘡とも呼ばれ、ヒトに対して非常に強い感染力があります。かつては、致死率が20〜50%と非常に高く、全身に膿疱が生じ、治癒してもあばた（瘢痕）が残ってしまいます。

独眼竜の異名で知られる伊達政宗が幼少期に右目を失明したのも、天然痘によるものとされています。

種痘

人類は、天然痘の予防にはワクチン接種が極めて有効であることを経験的に知っていました。その人痘接種法は、天然痘の感染者に生じた膿疱の一部を接種することで、人工的に免疫を獲得させる人類初の予防接種でしたが、接種者の2%が重症化して死亡するなど、危険を伴うものでした。18世紀末、イギリスの医学者エドワード・ジェンナーは、より安全性が高い牛痘接種法を開発し、種痘が全世界に広がった結果、1980年、WHO（世界保健機関）は天然痘根絶を宣言しました。

水戸藩の種痘



鹿嶋神社（下馬場）にある痘瘡神社

江戸時代の民衆にとって痘瘡（天然痘）は、疫病神が引き起こすと考えられており、痘瘡神としてお祀りすることで、感染者の平癒を祈りました。

本間玄調

天保13年（1842年）、水戸藩主徳川齊昭公は、医師本間道偉、玄調に命じて、人痘接種法による種痘の普及を進めましたが、種痘への恐怖心から、領民からは敬遠されていました。そこで、齊昭公と玄調は、種痘が感染予防に効果があることを示すため、自らの子どもに種痘を接種しました。



種痘の図 本間玄調 著『内科秘録』より

嘉永3年（1850年）からは、藩が経費を負担し、牛痘接種法を用いて、医師が巡村して実施するようになりしました。また、種痘の接種が広がりを見せると、集団種痘も行うようになりします。

最前線に立ち、種痘の名手として知られた玄調の種痘への情熱が実を結び、種痘接種数は、1万3400人に達しました。

新型コロナウイルスが全世界を席巻している昨今、感染拡大防止の切り札とも言えるのが「ワクチン接種」です。先人たちが乗り越えた天然痘根絶への闘いの歴史は、ワクチン接種の大切さを今に伝えています。

本間玄調（1804〜1872年）



水戸藩南郡小川村生まれ。水戸藩医、弘道館医学館教授を歴任。祖父は、小川稽医館の創設者の本間玄琢。華岡青洲、蘭医シーボルトなどに師事した。徳川齊昭公のもとで種痘を行い、多くの人命を救ったことから、「救」の名を賜った。本間家に関する資料は小川資料館に展示されている。

写真：『内科秘録』より

【語句解説】

膿疱：皮膚に現れる発疹の一つ。水疱の中には膿があり、粘性がかなり強いもの。

牛痘接種法：人間にも感染するが、あばたも残らず軽度で済む牛痘ウイルスを用いた予防接種。